浜風会会報　第24号

2014.1.1

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.24

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

家庭の年中行事

毎年巡ってくる年中行事は、この土地特有の風俗を形成して、親から子へ姑から嫁へと受け継がれてきたが、最近生活様式の変化に伴って、行事によっては省かれる家庭も出てきた。

心したい環境の変化

そんな折、最近自然の猛威とグローバル化による感染症の脅威が心配になってきた。

地震の他、異常気象による猛暑、豪雨、竜巻、台風の頻発等により土砂崩れ、洪水、浸水、水不足等過去経験したことのない被害が全国各地で発生している。この地にあっても今後無いとは言えない。

昨年は外国人旅行者が一千万人を超したとか、食べ物の輸入も以前より増加の一途である。世界の環境レベルが日本へそのまま影響してくるのは言うまでもない。ここへ来て心配事が増えてきた。

先人たちにとって、殆ど情報の無い中で、起こる地震、暴風雨等の不安事象に対し、住民に大きな安らぎを与えていたのが、巡ってくる年中行事だったろう。

家庭で行われる主な年中行事

一．　正月行事

多くの家庭で、新年を迎えるに当って一年間の無事に感謝しながら、新しい年が良い年であるように祈る。

・しめ飾り、歳神様、門松
・初詣（氏神様、寺院）
・浜ごり等

特に浜ごりは、海の自然の計り知れない力を恐れ、敬うことを表している。

二．　七草粥

一月七日の朝、七種の野菜を餅と共に粥に炊きこみ食べる。万病を払うものと言われている。

三．　恵比寿様

一月二十日と十一月二十日に、商売繁盛の神様を家庭料理でもてなしお祀りする。

四．　節分

邪気を追い払い無病息災を願う厄除けの行事で豆まきが行われる。

五．　八日餅

一年の無病息災を祈る二月八日、一年の無事に感謝する十二月八日、餅を食べる習慣。

六．　ひなまつり

三月三日、桃の節句で女の子の成長を願い、ひな人形を飾る。

七．　端午の節句

五月五日、男の子の成長を祝い、鯉のぼりを立て、柏餅をあげ菖蒲湯に入る。

八．　七夕

八月七日、願いごとを短冊に書いて笹竹につるす。星祭の行事。

九．　お祭り

十月第二土曜、日曜日、太鼓、笛そして手踊り等で、地域ごと若者が一体になる氏神様の祭り。

十．　お月見

旧暦の八月十五日と九月十三日の二回、月を神聖な神と崇め、団子や里芋にススキをあげる。

十一．　神様のお立ち

十一月一日、神様が出雲へ旅立つということで、お赤飯の弁当とご祝儀を供え送りだす。

十二．　地の神様

十二月十五日、地の神様に赤飯のおむすびを十二箇供え、家の安泰を祈る風習。

十三．　その他宗教行事

春と秋のお彼岸、そして八月のお盆と先祖を供養する行事がある。

また家庭の行事とは違うが七月十四日には、疫病除けをお祈りする八阪神社のお天王様がある。多くの人がお参りに行ったものである。

こうした年中行事を今一度見直し、大事にしていきたいものだ。

（山下勝彦）

平成25年度主な活動

★　山下孝先生講座
①「引札／広告の走り」
②「ミャンマーの遺跡」
★本年のテーマ
・地域の子供達にわかり易く
★　主な自由研究
・分間延絵図に記載の篠原
・海にまつわる仏様
・天空への信仰について
・「水野南北」について
・篠原の誇れる所を探そう
・江戸時代の旅巡礼記
・田んぼの開拓を探る
・神社の鳥居について
・浜堤防の移り変わり　等
★　バス旅行／小旅行
・6月20日：岡崎～豊川
・郷土の偉人記念館巡り

落花生 万国博覧会に出品の詳細

大正二年に編纂された『篠原村誌』の物産の項に「落花生は品質優良にして明治三十七年セントルイス博覧会に出品して金牌を受領」と書かれている。この詳細を知りたく資料を追ってみた。

セントルイス万国博覧会は、ルイジアナ地方をフランスから買収して百周年となるのを記念して一九〇四年（明治三十七年）に開催された。四十四か国が参加し、会期中約二千万人が来場したと記録されている。

日本政府は、明治三十四年に民間の出品を決め、翌年政府として参加する決定をしている。明治三十六年十一月二十一日の静岡民友新聞に県内の出品許可者が次のように掲載された。

「万国博覧会出品許可　予て出願中なりし聖路易博覧会本県出品物に対し、此程同総裁より許可されたるは山葉寅楠氏外十八人、六十四点にして其内訳左の如し」と説明し、本文の中に「（静岡県蕃椒・落花生出品組合）落花生二点、蕃椒三点」と落花生が出品されることが記されている。この出品組合は、博覧会出品のために組織され、組合長は織田利三郎である。万国博覧会に出品出来たのは彼の力によるものであった。

織田利三郎は遠州地方で栽培が増えはじめていた生姜・糸瓜（へちま）・蕃椒（とうがらし）・落花生の増産や栽培の改善、品質の改良に熱意を燃やし、明治三十四年遠江生姜糸瓜同業組合を発足させた。更に明治三十七年遠江生姜糸瓜蕃椒落花生同業組合に発展させた。明治三十四年の組合創立発起人の中に時の篠原村村長鈴木直三郎の名が見える。

出品する落花生の集荷や積出の状況は解らないが、全国の出品物は明治三十七年一月十五日までに横浜と神戸から積出しを完了させるべき通達が出ているので、これに従ったものと思う。

出品した生姜、糸瓜、蕃椒、落花生の陳列台は、浜松町板屋町の日本楽器で作られた。会場に据えられた大きさは、径十二尺、高さ二十八尺、中央五段の八角形で、糸瓜で菊の花の模様に飾られた立派なものであった。

会期中、出品物の審査が万国審査委員会によって行われ、最高賞、金賞、銀賞、銅賞の等級がつけられた。この褒章の詳細は明治三十七年十一月二十五日の官報に発表された。最高賞の植物的食料品の項に遠江蕃椒落花生出品組合と小笠郡農会、中野町村農会、篠原村農会、中瀬村農会が記されている。

糸瓜で飾られた陳列台と
織田利三郎（自著　国の花より）

ところで落花生は日本内地から十三の個人団体が出品しており、すでに名の通っていた千葉県のほか、茨城県、神奈川県、兵庫県、鹿児島県からも出品された。最高賞は遠江蕃椒落花生出品組合が、金賞は千葉県農会が受賞した。

織田は自著の中で、セントルイス万国博覧会では世界一流の地位を占むるに至れり、と述べている。その後の輸出の拡大を狙うなかで、大きく展望が開けたと感じたに違いない。

篠原村の作付面積を追ってみると、明治三十四年約五〇町、明治末頃と大正末頃約一〇〇町、昭和二十五年頃約五〇町となり、その後更に減少し商業的生産はなくなった。

以上資料から当時の状況が若干見えてきたが、出品のための村内の集荷の状況や、褒章のその後を語るものに触れることは出来なかった。今回がきっかけとなり、更に詳細な情報を期待したい。

（鈴木　忠）

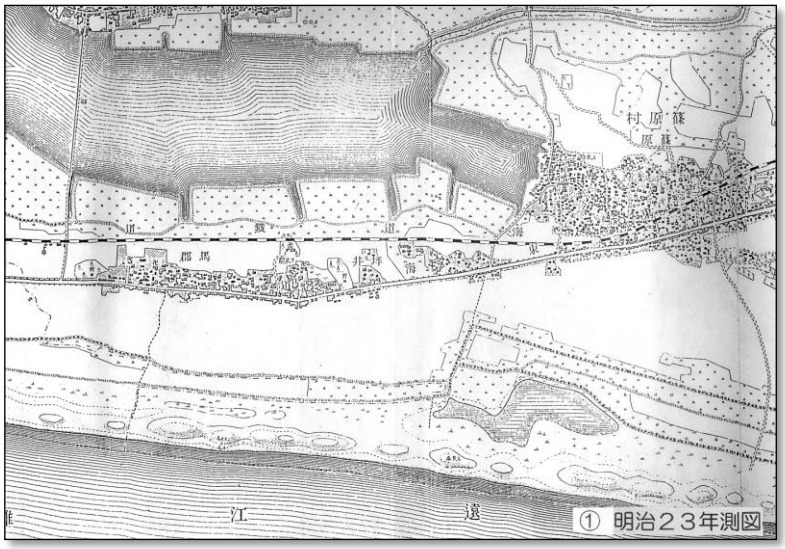
新田開発は安政年間

現在、裏の元田んぼや、養鰻池であったところが、一部メガソーラーに変わっていく様子が見える。そこで元の田んぼがどのようにして開発されたかを、ひもといてみるのも意義あることと考え、調べてみることにした。

新田開発は食料確保のため

明治二十三年の地図には、国鉄東海道線の裏に既にきれいに整備された田んぼがみえる。

『舞阪町史』に、湖水裏通りの新田開発を願い出た嘉永七年（一八五四）の古文書が紹介されている。要約すると、



① 明治２３年測図

「村高に対して人間が多く、凶年の年等は穀物が不足し、住民は困ってしまうので、自分達で開発の費用を用意するので、開発許可を得たい」というものである。篠原地区も同様だろう。

北浦の開発（同じく『舞阪町史』より）

安政元年（一八五四）の地震以後の北浦の開発状況を示したのが左図である。

①②③は舞阪の新田、塩浜である。

④は舞阪・馬郡・坪井三ケ村が共同開発した新田分で面積は四七町四反四畝六歩である。

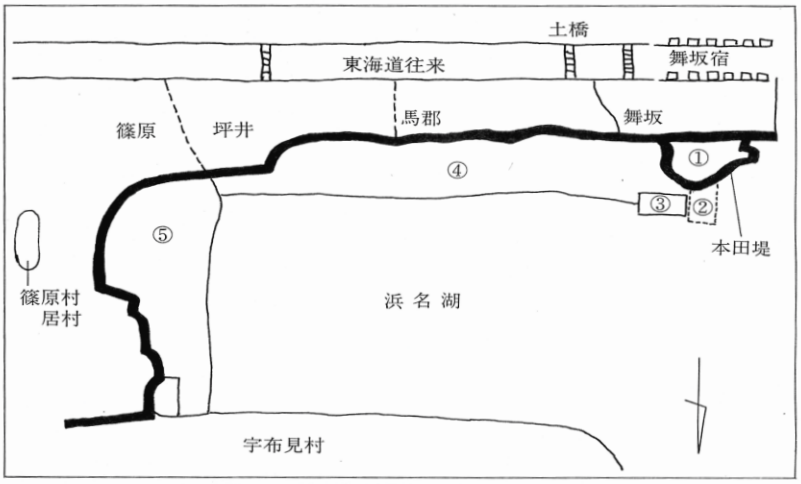


図50　安政元年震災津波以後麁図面

その内訳は

舞阪　十七町五反三畝一二歩

馬郡　十六町三反五畝一八歩

坪井　十一町五反五畝六歩

⑤篠原村の新開反別之内五一町歩である。

その後の変遷

又戦争中等食糧不足の苦しい時代にあっても住民が協力し合って取組んだことが想像できる。しかし整備されていた田んぼは昭和五十年代に入り減反政策から休耕田に変わった。

一方この地にあって、養鰻が明治三十八年から開始された。戦争中は一時中断したが、昭和四十年から五十年代が最盛期であった。その後荒地になった休耕田が一部養鰻池に変わっていった。しかしその養鰻も他県産地の台頭等による過当競争、安価な輸入品の増大、稚魚不足等厳しい条件にさらされ、荒地に逆戻りした。

メガソーラーによる土地利用

そんな荒地を有効利用しようと、メガソーラー事業者に賃貸し、平成二十五年、売電が開始された。今後その太陽光パネルは増加していくだろう。

（山下勝彦）

篠原のメガソーラー

白砂青松の前浜は今

私は平成二十二年度に自治会長をやっていた関係で、静岡県から委託を受け、県有防災林巡視指導員をしています。

月一回前浜の峠（堤防）の防災林の巡視を行なっています。松くい虫被害は年々拡大・進行している様子を巡視し報告しています。

昨年松くい虫被害による枯木を全て伐採した結果、馬郡町地区の前浜の峠はほとんど丸坊主になりました。中田島西側地区と同様です。そして今年の九月に巡視すれば、生き残っていたと思われた松の木が今どんどん赤くなっています。さらに範囲は隣の坪井町、篠原町、舞阪町へと拡大しつつあります。本当に目を覆いたくなる現状です。

台風が来るたび潮害・飛砂に悩まされているのも、クロマツの減少の影響が考えられます。

クロマツ林は潮害を防ぐ

海岸のクロマツ林は空中の塩分をその枝や葉でとらえ、潮風の害を防ぎます。200ｍの林がとらえる塩分は97％に達し、特にクロマツがとらえる塩分は、広葉樹の約十倍に及ぶともいわれています。（資料：飯塚肇他「難形防風林試験研究報告」（1））

遠州灘海岸の防災林造成の歴史

むかしの遠州灘海岸は、広漠たる不毛の砂地が広がっており、常に強風と戦いながら防災林を育ててきた歴史があります。

各地区の郷土史等によれば、馬郡町の南側の長十新田の開墾が、安永九年（一七八〇）に始まり、その南側に「長十新田波除土堤」が設けられ、そしてそこに松の植栽が行なわれる等して、耕作地を確保していったようです。

明治三十四年に遠州浜においてクロマツの植栽が始まり、篠原地区では明治四十三年に村長の考案により三年かけて青年会員が堤防に松を植栽した記述があります。このように先人たちは、潮害・飛砂などに悩まされながら植林を続けてきました。前浜の峠に県営事業として松の植林が始まったのは昭和七年からで、終戦後本格的に植林が行なわれました。

松くい虫対策と津波防潮堤整備について

松くい虫対策として薬剤散布（空中散布・地上散布）、被害木駆除、抵抗性クロマツの植栽、樹種転換等行なっていますが、ほとんど被害の拡大ペースに追いつかない現状です。

津波防潮堤整備は、現状の７ｍを13ｍにかさ上げ（馬郡町、舞阪町はバイパスの南側に新設予定）し、堤防上に植栽を予定していると聞いています。この植栽に使用する木種を検討することと、植栽後の維持管理を地域と一体となった体制をいかに確立していくかが重要と思われます。松くい虫対策と防潮堤整備は同時進行とスピード感ある事業が潮害・津波から地域を守ることだと信じます。

（藤田博辞）

歴史メモ15

浜ちぎの話

「杉のしらただもんで、飯がねがらんだ。うちじゃあ麦飯食ってても、浜にゃあ米の飯を入れてった。梅干し、金山寺、らっきょう、煮物。うんまかったなあ。浜じゃあすぐ腹んへるもんで、時間は決まってんかったが、何度にも分けて食った。こりゃあ、オレが若い時（昭和２６年）作ったもんだ。中あ錆びんよう竹釘ん打ってある。くろにゃあ、あかあ張って腐らんよう、ぶっつけてもいいよう丈夫にしといた。これだと雨ん降っても、塩水かぶっても中にゃあ通らんて」

明治生まれの古老から聞いた話でした。チギはチゲとも言う。チは釣針、ケは容器の意。すなわち釣箱をいう古語ではないか。神奈川県から三重県にかけての漁村漁民の間では、漁の道具を入れて船中に携帯する木箱をいう。静岡県中部から西部の海辺では、漁師が船中に携える飯鉢の名ともなっている。（鈴木幹久）

浜風会会報第２４号
篠原協働ｾﾝﾀｰ同好会「浜風会」
（篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）
編集委員　委員長　山下勝彦
鈴木清　鈴木義雄　鈴木幹久
鈴木忠　中山清
発行責任者　山下勝彦
発行平成２６年１月１日
連絡先：浜松市篠原協働ｾﾝﾀｰ気付